

叔母の法事に参列した時の事です。お経が終わり食事していると、亡くなった叔母の話になり、私は「ただただ厳しく怖い方だった」と家族の方に話したところ、実はそれには訳があったという話を聞かされました。

子供の頃、両親と叔母の家へ遊びに行っただけですが、食事をしていて叔母に「箸の持ち方が汚い」と言われました。それ以来叔母と食事をする時、必ず箸の持ち方について指摘をされるようになり、それが嫌でいつしか叔母と疎遠になってしまいました。それから10年以上が過ぎ、大人になってから久しぶりに叔母に会う機会がありました。その時叔母と一緒に食事をしたのですが、私が帰った後、叔母は涙を流していたそうです。私も大人になり箸の持ち方を自分で直してはいたのですが、その姿を見ての嬉し涙だったようです。

叔母はお寺で生まれ育っていましたので、私が僧侶として生きていくにあたって「箸の持ち方」を人に見られても困らないようにと、嫌われることを承知で直そうとしていたのです。私への厳しさは、叔母なりの優しさだったのです。

その話を聞き、叔母は、普段とても優しくかったことを思い出しました。そして、今まで叔母に怖いという印象を持っていた事に、申し訳ない気持ちになりました。私は食事中にもかかわらず席を立ててお仏壇の前で手を合わせ、心の中でお礼を言ったことを今でも覚えています。

私が今日こうしてお勤めが出来る理由の一つが叔母のおかげだったと思うと、今でも叔母に手を合わせずにはいられません。ご供養というと、多くの方はお坊さんにお経をあげてもらうことを思い浮かべると思います。しかし本来のご供養は、私たちがその方の事をいつまでも大切に思う「報恩の心」なのではないでしょうか。